

がん治療の今

■■■18

難しい早期発見

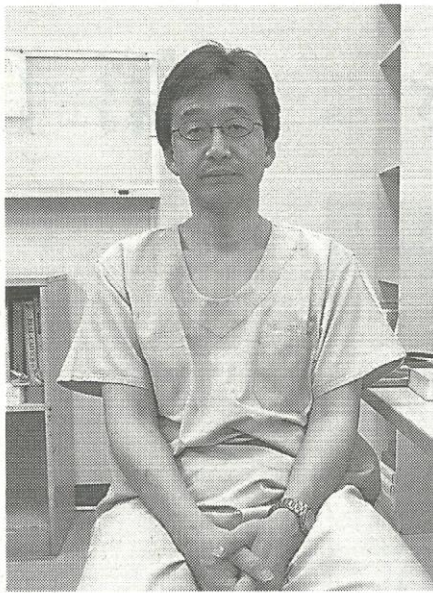
胆道とは、肝臓でつくられる消化液・胆汁を十二指腸まで送り届ける経路のことです。胆管、胆のう、十二指腸乳頭部の三つの部分からなります。ここから発生した悪性腫瘍を「胆道がん」と呼びますが、最近の統計をみると、男性では9番目、女性では7番目に死

亡数が多く、決して珍しいがんではありません。胆道がんは、早期には自覚症状がほとんど無

胆のう・胆管がん編

難しいがんの一つです。代表的な症状に黄疸があります。胆道にがんができますと、十二指腸に流れにくくなった胆汁が、血液にあふれ出し、胆汁の色素成分が皮膚や目の白目部分に沈着して黄色くなります。病気が進行すると、右上腹部に痛み

進行すると黄疸の症状



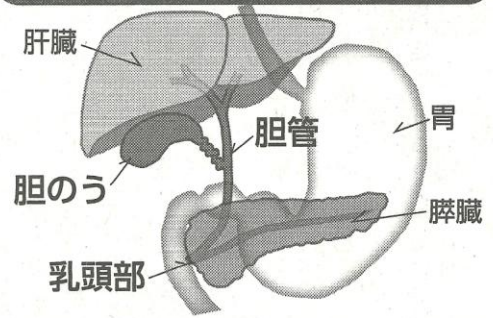
製鉄記念室蘭病院・藤井重之消化器内科長

ふじい しげゆき 1989年(平成元年)札幌医大卒。医学博士。内科学会認定医。消化器病学会専門医。消化器内視鏡学会専門医。52歳。

く、進行して初めて症状が出るため、早期発見が

が生じたり、熱が出たりすることもあります。

胆道の模式図



を行います。さらに、内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)と呼ばれる特殊な内視鏡を用いた検査で、腫瘍から検体を採取して、がん細胞の有無を調べる確定診断も行っております。

一般的には、他の臓器や胆道から遠くのリンパ節へ転移を起している場合は手術が難しく、抗がん剤治療や放射線療法などを行います。全身状態が良好ならば、ゲムシタビン+シスプラチンによる治療が標準治療ですが、高齢者や全身状態があまり良くない場合には、ゲムシタビンやS-1の単剤投与を行います。

がんの検査は、主に血液検査と画像検査になります。最近では、画像検査の進歩が目覚ましく、超音波検査、コンピュータ断層撮影(CT)、磁気共鳴画像装置(MRI)、磁気共鳴胆管膵管造影検査などで、がんの存在診断にとどまらず、進行度も診断することが可能です。

また、製鉄記念室蘭病院では、転移の有無を調べるために、陽電子放射断層撮影(PET)検査

結果に基づき、患者さんの年齢や体力、合併している病気なども検討し、患者さん、ご家族と相談して治療方針を決定します。

胆道がんを根治する唯一の方法は、外科切除と考えられており、手術でできるか否かが治療選択の大きなポイントになります。この分野でも、近年は進歩が目覚ましく、その治療成績は向上してきております。

ただし、どの治療を行うにしても、黄疸を合併している場合は、まずは黄疸を改善する治療(胆道ドレナージ)を行うことが重要です。ERCP検査の際、胆汁を排出するためのドレナージチューブを留置することも、よく行われております。

治療については、患者さんの状態を十分に考慮し、その患者さんにとって最も良い治療方法は何かを考え、患者さんやご家族が納得した上で、治療を進めることが重要です。